

IV. 多賀城跡の 11 世紀～12 世紀の土器について

今回の調査で出土した SD2770 溝底面出土の土器は、高台の付く器種や土師器・須恵器を含まない点で 10 世紀以前の古代の土器組成とは大きく異なっている。一方で、第 50 次調査 SX1623・1629 平場を覆う堆積層で発見された「手捏かわらけ」を含む 12 世紀後半代の土器群とも様相を異にしている。こうした特徴から、SD2770 溝底面出土の土器は、両者の間に位置する 11 世紀から 12 世紀前半代の土器群とみられる。

多賀城跡では、城内出土土器を A 群から F 群の六つの土器群（政庁跡本文編：271 頁参照）に分け、8 世紀から 10 世紀代までの土器変遷をとらえている。しかし、F 群より新しい土器が出土した場合は、個別に年代的検討をおこなってきた。ここでは、今回の出土資料である SD2770 溝底面出土の土器の年代的位置をより明確にする意味からも、これまで個別に検討されてきた 11～12 世紀代の土器の新旧関係を整理し、F 群土器以後の多賀城内出土土器の変遷を概括することにしたい。

須恵系土器について

多賀城跡の 11～12 世紀代の土器変遷を検討する上で基礎となるのは、前段階の F 群土器で主体となる須恵系土器の変遷である。須恵系土器は、9 世紀後半に出現し（年報 1991：137 頁）、10 世紀以降の E 群土器段階で割合を高め、F 群土器段階では土師器・須恵器に代わって土器組成の主体を占める（政庁跡本文編：389 頁）。さらに、F 群土器については、第 68 次調査の報告（年報 1997：67 頁）で 1～4 群の 4 段階に分け、最新段階の 4 群をさらに a・b の 2 群に細分している。

一方、これら F 群より新しい時期のロクロ成形で酸化炎焼成された土器については、報告文によつて「須恵系土器」「ロクロかわらけ」「土師質土器」などの異なる呼称を用いて提示してきた（註 1）。これらの土器は、呼称こそ異なるが、いずれも「須恵系土器」から連続的な変遷を辿れる 11～12 世紀代の同一系列の土器である。また、供膳形態が壺（大型壺）と小皿（小型壺）に集約された組成をなす点で、13 世紀以降の素焼きの土器群と類似した様相を示している。

このように、多賀城跡における 11 世紀から 12 世紀代の土器は、古代的な須恵系土器から、中世的な土器への過渡的な特徴を示す土器群として位置づけられる。そこで以下では、これらの土器を「須恵系土器」と区別し「ロクロ成形酸化炎焼成の土器」と呼ぶこととする。

ロクロ成形酸化炎焼成の壺・皿形土器の分類

多賀城跡における 10 世紀から 12 世紀代の土器組成の主体を占めるロクロ成形で酸化炎焼成された壺・皿形土器について、器形的特徴を抽出し易い底部破片に着目すると以下のように分類される。

I 類：薄い底部から体部に丸みをもって立ち上がり、その境が不明瞭なもの。

II 類：底部が厚く、底部と体部の境に明瞭なくびれがあるもの。

A：底径が小さく、体部が大きく外傾するもの。

B：底径が大きく、体部の立ち上がりが急角度のもの。

III 類：底部の腰が高く、高台状になるもの（註 2）。

IV 類：柱状高台（註 3）。

土器群の設定

F群土器およびこれに後続するとみられる土器群について、主体となるロクロ成形で酸化炎焼成された土器の壺・皿類の底部形態の変化、法量の変化、高台付の壺・皿類の消長、伴出土師器・須恵器壺類の消長、などの要素を指標として整理するとF群に後続する土器群は大きく4つの群に分けられる。これらをG~J群と呼称し以下その概要を記述する。

F-3群土器：

(第37次調査外郭南辺西部地区SD1221B4層、第60次調査大畠地区SE2132井戸跡、第61次調査鴻の池地区第7層、第62次調査大畠地区SK2175・2178土墳、第66次調査大畠地区SE2315井戸跡)

須恵系土器の壺類に大型壺と小型壺の分化がみられるが、法量の分化が不明確である。器種組成では、角高台の付く壺・皿類の比率が高い。伴出遺物として、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・越州青磁などがある。灰白色火山灰層との層位関係および、篠窯の須恵器鉢から10世紀中葉の年代が想定される(年報1997)。

F-4a群土器：

(第32次調査政庁北方地区基本層第4層、第37次調査外郭南辺西部地区SD1221B1~3層、第56次調査大畠地区基本層第2B層、第64次調査大畠地区SE316・317・715井戸跡、第68次調査大畠地区SX2449土器廃棄土墳出土土器)

須恵系土器壺類の大型と小型の法量分化が明確で、小型壺(皿)の割合が高い。壺類の底部形態は薄い底部の1類である。高台付壺・皿類も一定の割り合を占め、これらも大型と小型の法量分化が明確である。また、長い中空の脚部を特徴とする器台高壺がみられる。伴出遺物として、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・邪窯系白磁・越州青磁などがある。年代については、第68次調査大畠地区SX2449土墳出土灰釉陶器広口瓶が東美濃虎渓山1号窯式期に比定されることから、10世紀後葉の年代が想定される(註4)。

F-4b群土器：

(第4次調査政庁跡SK078土墳、第28次調査五万崎地区SD927溝、第36次調査作貫地区堆積層2層、第66次調査大畠地区SE2314井戸跡・SX2319土器廃棄遺構出土土器)

須恵系土器壺類の大型と小型の法量分化が明確で、小型のもの(皿)は、口径10cm未満のものが主である(第3表)。口径に比して器高が低平で、底部形態は薄い底部の1類が主であるが、厚手で底径の小さなIIA類や高台状の皿類もみられる。器種組成においては小型壺(小皿)の割合が高く、高台の付く器種も一定量存在する。その他の器種として台付鉢・三脚付鉢が伴う例がある。伴出遺物として、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・邪窯系白磁・越州青磁があるが土師器・須恵器はごく少ない。前後の土器群との関係から10世紀末から11世紀前葉の年代幅が想定される(註5)。類例として白

石市植田前遺跡 1・2 号溝状遺構出土土器があげられる。

G群土器 :

(第 32 次調査政府北方地区 SE1066 井戸・第 2 層、第 58 次調査大畠地区 SK2013 土墳、第 62 次調査大畠地区 SK2169・2170・2171 土墳、第 71 次調査城前 SD2610 溝出土土器)

ロクロ成形土器壺類の法量分化が進み、口径 15cm 前後の壺と、口径 9cm 前後で低平な小型の皿に集約される（第 3 表）。高台の付く器種はごく少量で、底部形態は薄い底部の 1 類と、厚手で径の小さい II A 類の割合が拮抗し、高台状の皿類もみられる。他の器種として台付鉢・三脚付鉢が伴う例がある。伴出遺物として、土師器・須恵器・綠釉陶器・華南産白磁がある。土師器は白磁碗を模倣したような特殊な器形のものがあり、須恵器は瓶・甕類が少数みられる。共伴した白磁皿 II - I 類の年代観から 11 世紀中葉を中心とした年代が想定される。

H群土器 :

(第 16 次調査政府地区 SK375 瓦溜、第 23 次大畠地区 SE715 井戸、第 43 次調査南地区第 3 層・同北地区第 6 層、第 60 次調査大畠地区 SK2134 土墳、第 78 次調査城前地区 SD2770 溝・同道路西側第 8 層出土土器)

皿は口径が 9cm 以下ときわめて小型で低平である（第 3 表）。底部形態は厚手で径の小さい II A 類と、高台状の III 類が主となり、薄手の I 類はごく少ない。高台の付く器種はみられない。他の器種として器台高壺・三脚付鉢が伴う例があるが台付鉢は確認されない。土師器・須恵器もみられない。高台状で大型の壺 III 類は、岩手県河崎柵擬定地や中尊寺金剛院下層や柳ノ御所 52 次 SE50 に類例が求められる要素と考えられることから、土器群の年代として 11 世紀後葉～12 世紀前葉の年代が想定される。類例として仙台市中野高柳遺跡 SX2000 下層出土土器があげられる。

I群土器 :

(第 43 次調査南地区基本層第 1・2 層、第 50 次調査 SX1622・1629・SK1641 土墳、第 56 次調査大畠地区基本層第 2A 層、第 58 次調査大畠地区 SD2050 溝、第 78 次調査道路西側第 6 層出土土器)

土器組成に、新たに手捏土器壺・小皿が加わる。ロクロ成形土器の底部形態は、壺は厚手で底径の小さな II A 類が主体であるが、皿は体部の立ち上がりが短い II B 類が多くみられる（第 41 図）。また、高台状の III 類に加え、IV 類の中実の柱状高台が普遍的にみられ、器台高壺が伴う例もある。伴出遺物として、灰釉陶器・華南産白磁、同安窯系青磁・龍泉窯系青磁・常滑三筋文壺・甕などがある。伴出する白磁・青磁類の年代観により、12 世紀中葉から 13 世紀初頭の年代幅が想定される。類例として仙台市中野高柳遺跡 SX2000 上層出土土器があげられる。

J群土器 :

(第 28 次調査五万崎地区 SK917 土墳・SD926 溝、第 43 次調査城前地区 SK1373 土墳・SX1375 整地層、第 56・59 次調査大畠地区 SE1933・1934 井戸、同基本層第 2 層出土土器)

土器組成に占める手捏土器の量は少なく、ロクロ成形の壺・小皿が主体である。ロクロ成形の壺・小皿は、いずれも底径が大きく体部の立ち上がりが短いⅡB類が主体（第41図）で、ⅡA・Ⅲ類やⅣ類もわずかにみられる。伴出遺物として、龍泉窯青磁、常滑産三筋文壺・大甕、在地産片口鉢・甕、石鍋などがある。青磁や陶器類の年代観から13世紀代の年代が想定される。類例として仙台市中野高柳遺跡SX1397出土土器があげられる。

以上のように資料の層位関係や伴出遺物の年代観を参考にして、新旧関係を整理し、古い順から並べると第4表のようになる。また、10世紀から13世紀までの土器の系列の変遷を概括すると第40・41図のように連続的な変遷があとづけられる。

これらの土器は、受領や在庁官人が関与する儀式的饗宴に用いられた土器群とみられ、貿易陶磁器類の出土状況（年報2005参照）等とも関連して、この時期の国府もしくはそれに関連する施設の所在を示唆する重要な遺物と考えられる。

これまで、11世紀～12世紀の土器が未整理の段階で、国府・国庁機能の城外への移転の可能性が検討されたこともあるが、今回の土器の検討結果を踏まえると、11世紀～12世紀代の国府・国庁機能は、城内のいずれかの場所で保持されていた可能性が高い。この時期のまとまった遺構はこれまでの城内の調査では発見されておらず、検討課題は残るが、11世紀～12世紀の土器の出土状況から見ると、政庁をはじめとして、政庁北方地区、大畠地区、城前地区、五万崎地区などでこの時期の遺構の発見が期待される。今回の土器変遷の整理を契機に、今後は遺構の再検討も進めていく必要があろう。

最後に、当該時期の土器変遷の検討は、東北地方各地で進められており（註6）、特に平泉藤原氏とそれに先行する安倍・清原氏に関係する遺跡が点在する岩手・秋田両県地域では、実年代を推定できる資料が豊富で、11世紀～12世紀代の研究が大きく進展している。岩手・秋田両県地域の土器を多賀城跡出土土器の変遷と比較すると、土師器・須恵器・柱状高台・手捏土器の消長はほぼ同一の歩調を辿るが、土器群の主体をなすロクロ成形で酸化炎焼成の土器については、体部の立ち上がりが短い壺・皿ⅡB類の出現時期が多賀城ではやや遅れるとみられる。多賀城跡の土器の須恵系土器からの一連の変化は暫移的であり、国府・国庁の土器は古代的な須恵系土器の特徴を遅くまで残すとみられる。

こうした土器のあり方は、安倍・清原氏、平泉藤原氏関係の遺跡と多賀国府、鎌倉、京都、博多、太宰府などとの相互関係の中で比較・検討されるべき要素であろう。今回の出土資料はその中では、地域的、年代的にきわめて重要な位置にある資料と考えられる。

註1: 一例として、第32次調査SE1066井戸跡出土の「須恵系土器」、第43次調査各層出土の「須恵系土器」・「かわらけ」、第61次調査鴻ノ池第1～5層出土の「土師質土器」などがある。

註2: この種を「柱状高台」に含める見解もあるが、明瞭なⅣ類と区別して「高台状の底部」とする。

註3: 狹義の「柱状高台」としてⅢ類と区別する。

註 4：岐阜県多治見市教育委員会山内伸浩氏のご協力により、資料を直接比較した結果、器形・胎土・釉調とも虎渓山 1 号窯の製品に酷似していることが確認された。

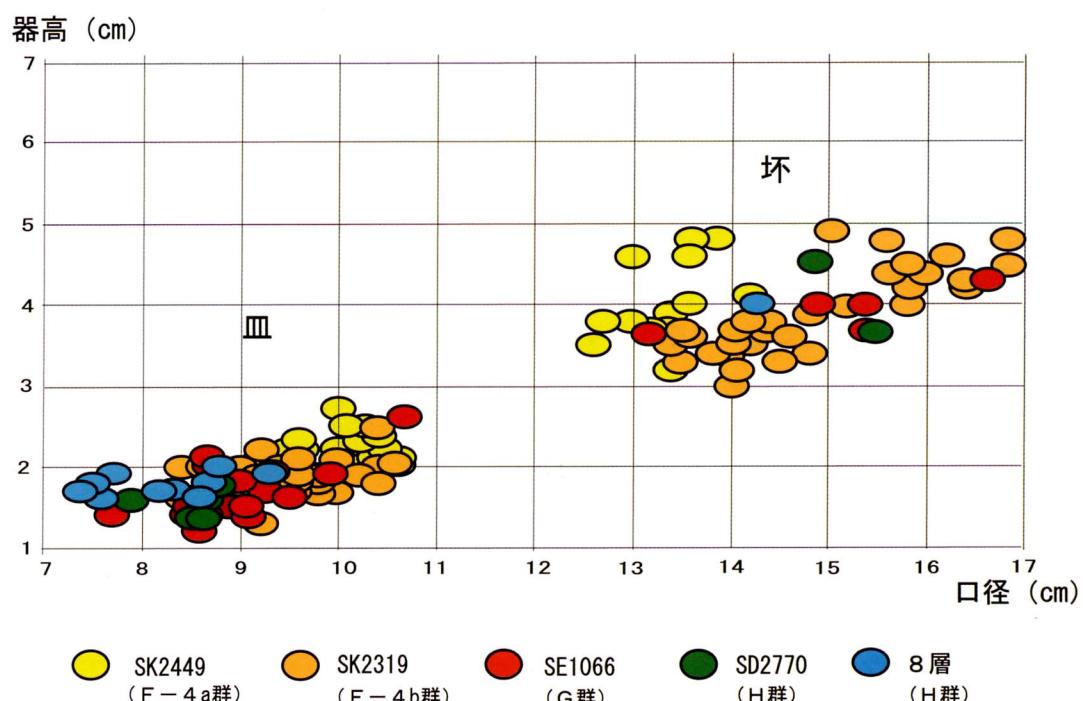
註 5：F-4 a 群と 4 b 群については時期差を想定しながらも、年代的には 10 世紀後葉に位置づけてきた。これは、「政府の主要建物の廃絶年代が 11 世紀まで下らない」という想定の上に導き出された年代観である。

しかし、4 b 群土器の年代根拠とされてきた SK078 の白磁皿を再検討した結果、これまで邪窯系とされてきたものが皿 VI-1 a 類であることがわかった。したがって F-4 b 群土器の下限は 11 世紀に及ぶ可能性が高まった。また政府跡出土遺物の中に、11 世紀以降の灰釉・山茶碗や陶器貿易陶磁器類が含まれていることがわかっている。具体的なデータの提示は整理途上であるため後日を期すが、政府の廃絶年代を含め、F-4 b 群土器の年代的位置づけについても再検討の余地があるのは明らかであり、ここでは、F-4 a 群土器との時期差を想定し、F-4 b 群土器を 10 世紀末から 11 世紀前葉の年代幅の中に位置づけておきたい。

註 6：伊藤武士、井上雅孝、植松暁彦、島田祐悦、千葉孝弥、羽柴直人、八重樫忠郎、吉田博行氏ら多くの方々からご教示をいただいた。

参考・引用文献

- 多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政府跡 本文編』
多賀城跡調査研究所 1991 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』 (第 60・61 次調査)
多賀城跡調査研究所 1997 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』 (第 68 次調査)
多治見市教育委員会 1990 『明和古窯跡群発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財調査報告書第 25 号
北上市教育委員会 2003 『国見山廃寺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 55 集 北上市教育委員会
会津坂下町教育委員会 2005 『陣が峰城跡』会津坂下町文化財調査報告第 58 集 会津坂下町教育委員会
宇野隆夫 1997 「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集
羽柴直人 2001 「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第 13 号 岩手考古学会



第 3 表 ロクロ壺・皿類の法量分布 (口径・器高)

第4表 多賀城内出土10~13世紀の土器

土器群	器種 主な遺構	土師器	高台付	坏			陶磁器 Ⅲ類	陶磁器 Ⅲ類
				I類	IIA類	III類		
F-4a 群	第68次調査 SX2449 土壙							
	第4次調査 SK078 土壙							
G群	第32次調査 SE1066 井戸 第2層							
	第43次調査 南地区第3層							
H群	第78次調査 SD2770 溝							
	第78次調査 道路西側第8層							
	第43次調査 北地区第6層							

第40図 11～12世紀の土器変遷 (1)

土器群	器種 主な遺構	手捏土器			口クロ成形土器			IV類	陶磁器 ほか
		壺	壺	壺	壺	壺	壺		
I群	第78次調査 道路西側第6層								灰釉陶器 瓢 東美濃 明和27号窯式期
	第50次調査 SX1629・SK1641 土壤								常滑 白磁 瓢 華南
	第43次調査 南地区第1・2層								常滑 白磁 瓢 華南
	第58次調査 SD2050溝								常滑 白磁 瓢 華南
J群	第56-59次調査 SE1933・1934 井戸								常滑 白磁 瓢 華南
	第43次調査 SK1373 土壙								常滑 白磁 瓢 華南

第41図 11～12世紀の土器変遷 (2)